



**嘉手納カーニバル  
南海部 覚悟**

沖縄自動車道（沖縄南インター）を降りて、嘉手納エアベース・ゲート2、その方向にハンドルを切る。

IDカード（身分証明）を提示して、ゲートを通過する。

緩やかに右カーブする広い道路の左右には、ゆったりとした米軍ハウスが、整備された芝生の中に点在する。

何れも、伸びやかな平屋建て鉄筋コンクリート、白い外壁のアメリカン・スタイルだ。沖縄の航空写真を見ればすぐ気が付くが、ゲートの内と外では、住宅を取り巻く環境がまるで違う。

ゲートの外では――殆どの日本住宅がそうであるように、狭い敷地の様々な条件をいじましいまでに反映して、建物の規模や形態が決定されている。

ゲートの内では――そもそも、敷地境界というものが存在しないので、ゆったりと気ままに、自由奔放にレイアウトされているように見える。

そこには、かつてこの地を占領し支配していた者と、支配されていた者との佇まいの違いが、今日も厳然と存在するような気分になる。

沖縄の戸建て住宅の殆どは、RC造（鉄筋コンクリート）だ、それも本土のRC住宅によくある（壁構造）ではなく、柱と梁で構成された（ラーメン構造）。

壁はCB（コンクリートブロック）を積み上げる、RCの柱や梁を打設する前に、ブロックを積んでしまう（CB先積工法）だ。

先積みしたCB壁を、柱や梁のRC仮枠に使う訳だが、その先鞭は、恐らく敗戦後すぐに入植してきた米軍ハウスに違いない。

常に潮風に晒され、夏場の強烈な日差し、台風最盛期の進路上に位置するこの地の風土に、米軍ハウスがマッチしたのだろう。

本土の人間が余り知らないことだが、沖縄の屋根（陸屋根）には一般に防水層がない。アスファルトやゴムシートといった、建築防水素材が沖縄の日射に耐えられないのも理由の一つだが、温暖な沖縄では、自然の水が凍ることが無い。

屋根スラブに滲み込んだ雨水が凍結して、ヘヤクラックを押し広げることも無いので、コンクリートを密実に打設さえしておけば、雨漏りすることも無いのだ。



今日は、7月4日のインディペンデンス・デイに合わせたアメリカ・フェストだ。

かつては、（嘉手納カーニバル）と呼ばれていた空軍基地最大のお祭りで、ゲート1とゲート3が一般市民に開放される。

運転免許証を提示すれば、日本人でも基地の中でアメリカ・フェストを楽しむことが出来る。

嘉手納ベースの飛行場には、2本の4,000m級滑走路が、並行して存在する。今、その北東の端から順番に、人々が車を並べている――フェストの入場者の駐車場として滑走路を使うのだ。

そして、巨大な格納庫の前には、最先端のジェット戦闘機や攻撃機が……かつてはF-15（イーグル）やF-16（ファイティング・ファルコン）がスターだったが、今やF-22（ラプター）のダークグレーの機体に人が集まっている。

その奥にはステルス爆撃機B-2（スピリット）、ステルス攻撃機F-117（ナイトホーク）の黒い機体が控える。

格納庫からゆっくりと引き出されてきたのは、最新鋭のF-35（ライトニングII）か……。

ベテラン勢として、超音速爆撃機B-1（ランサー）、戦略爆撃機B-52（ストラトフォートレス）、30mmガトリング砲のA-10（サンダーボルトII）、早期警戒管制機E-3（センチリー）。

――そして最後に、物議を醸すV-22（オスプレイ）の巨大なティルトローターがサイドバイサイドで空を睨む。

それら米軍機を取り囲むように、様々な模擬店がテントを並べて出店される。

国内で販売されていないアメリカン・グッズやフードも、此処には豊富に存在する。お勧めは、巨大なエアフォース・ピザと、独特な形のペットボトルに入った超辛口コーラだ。

単純で明快な味が、熱い沖縄の気候にマッチして爽やかだ。

沖縄の食材は、伝統的な沖縄料理も有名ではあるが、概して、ステーキ、ハンバーガー、フライドチキン、ホットドッグ、ミートローフ、ポークチョップ、チョリソー、マッシュポテトといったアメリカンフードが安くて豊富で、加えて旨い。

戦後米軍から放出されたスパム（ランチョンミートの缶詰め）はゴーヤーチャンプルーの食材として、それこそマストな存在だ。

米軍放出といえ、年に1～2回、メジャー系のガソリンスタンドに米軍の燃料が出回ることがある。

国内系小売りスタンドも赤字覚悟で競争に加わって、一気に¥90～¥70/L位までガソリン値段が下がる。



今は台風シーズンである、台風の強さの指標に（最大瞬間風速）があるが、沖縄は最大瞬間風速が、10分も15分も続く。

（風の息）というものが無いのだ、一度吹き始めたら、同じ方向に同じ強さで、いつまでも吹き続ける。

台風襲来で会社が早引けとなり、帰宅した玄関ドアが風圧で開かなくて、マンションのロビーに30分ほど退避せざるを得なかった経験もある。

台風が過ぎた後は、すぐに洗車をしなければならない。

海で巻き上げられた潮の飛沫が、内陸深く吹き上げられる。放っておくと数日で赤錆が浮き出てくる。

沖縄の新車の多くが、納車前に特殊な防錆処理をディーラーオプションで行うのはこの為である。

目的のオフィス棟の駐車場に車を止める。

排水側溝のコンクリート蓋の穴から、灰褐色の小動物が頭をもたげた。

——マングースである。

戦前、ハブ対策の為に沖縄や奄美に、インドから導入された。

ハブに対しては期待されたほどの効果が無く、逆に沖縄の生態系を完膚なきまで破壊しながら、全島に繁殖した。今では駆除の対象とされる害獣である。

可愛いからといって、近寄ってはならない、異常に狂暴である。

狂犬病のような感染個体の報告もあることから、人間にとってある意味猛毒のハブより危険な対象なのかも知れない。

むしろ今では、ハブの方が人間と上手く共存している。

人とハブの生活圏は多くの部分で重なり合う、那覇や名護のような大都市の中心部でも、ハブは生息する。

ネズミを追って排水路やごみ置き場に多く出没する、石垣の隙間や夜の墓地はハブの巣窟である。だから、（ウチナンチュウ）はその時間そのような場所に近寄らない。

血清の配置を中心とした医療体制の充実と、農作業に於いては（ゴム長靴）の使用が、ハブによる死亡事故を激減させた。

それでも、宴会で深夜帰宅したマンションの植栽で、恐怖のまだら模様を肝を潰すのは、今でもままあることだ。

今日の仕事は、リースのオフィス機材（コピー機・プリンター・FAX）のメンテナンスだ。

LANケーブルで複雑に接続されたシステムが、完全に停止するのは、今日のような基地全体の休日以外にない。警備ブースにIDカードを提示して、通いなれた長い廊下を進む。

両側には、シネマでよく見るアメリカのオフィスそのものが並んでいる。

実をいうと、アメリカのオフィスも、机を突き合わせて並べる島型レイアウトが主流である。これは80年代にアメリカの企業が、日本から学んだレイアウトだ。

ただしそこはアメリカ、日本とは全く違う（島）の解釈が存在する。

円形、楕円形、卵型、まるで高級レストランの洒落たダイニングテーブルのような大型のデスク（島）に、椅子とノートパソコンを持ち寄って顔を突き合わせて仕事をする、飽きたら好きな島に場所を変える、個室やブース式のレイアウトに、社内コミュニケーションの限界を認めた企業幹部のアイデアだ。

無線LANの普及と相まって、今や島型レイアウトがアメリカン・スタンダードだ。

しかし、そのアメリカン・スタンダードもあと一年足らずで此処から姿を消す。

嘉手納エアベースそのものが無くなるのだ。

嘉手納だけではない、普天間は言うに及ばず、キャンプ・ハンセン、キャンプ・シュ

ワブ、ブルービーチ、ホワイトビーチ、沖縄本島及び周辺に展開する全米軍施設が、Y  
ナンバー（米軍関係者のナンバープレート）と共に西表島に移転する。

事の起こりは、五年前の県民投票だ。

普天間・辺野古移設問題、オスプレイの度重なる事故、日本人女性暴行事件等に対する日本政府の冗長な対応に、業を煮やした時の沖縄県知事が、県議会の賛同を得て前代未聞の県民投票に打って出た。

県民に問うたのは、「沖縄本島から、米軍基地を排除する為には、日本からの独立を厭わないか？否か？」

58%の近差で、沖縄県民は日本からの独立を支持判断した。

中華人民共和国、大韓民国が「平和的に移行されるなら」との条件のもと、独立承認の意思を表明した。ロシア、北朝鮮がそれに続く、中国から促されるように、AIIB（アジアインフラ投資銀行）加盟のヨーロッパ諸国が追随する。

最終的に、国連加盟の過半の諸国が、同様の意思を発表した。

無論、地政学的に沖縄の置かれた位置は、大国の（ポリティカル・パワー・バランス）の中心にあって、平和的な国家独立など現実的ではなかった。

ただし、この投票結果を背景にして、日・米政府と新たなスタンスで交渉が出来る・・・。

沖縄本島及び周辺の、全米軍基地・施設の西表島移転が決定されたのは、この県民投票の一年後のことだった。



4年前の沖縄県議会での、知事の有名な演説がある。

——丁度一年前、私たちは日本からの独立を厭わない、悲壮な覚悟を全世界に示しました。

そして長い交渉の結果、私たちは継続して日本に残留し、同時に世界平和の為、米軍基地を西表島で運用・維持させる決定を承諾いたしました。

当然ではありますが、西表島に軍事基地を移設するに当たっては、世界中の様々な政府機関、民間団体、学術機関、有識者、活動家、一般個人から多くの批判を頂きました。

（東洋のガラパゴス）と称され、手付かずの自然が、我国最大のマングローブを育む亜熱帯の環境は、学術資源としても、観光資源としても、唯一無二の存在です。

沖縄にとって、我国にとって、否、世界中の人々にとって、何よりも替え難い至宝であり、掛替えのない自然であります。

もし沖縄で、米軍の基地を運用・維持することが、人類の歴史上どうしても必要なことであれば、私たち沖縄は、人類共通の宝であるこの島を、其のために使っても構わないと考えます。

大きな成果を目指すためには、また大きな犠牲を強いるためには、大きな代償を支払うべきなのです。

沖縄から全ての米軍基地を無くすと言う、当初の理想からすれば、今回の決定は、私自身断腸の想いではありますが、それらを切り捨てても、私たちには守るべき命が在るのです――。

アメリカは、基地の移転に伴い、東アジア軍事戦略の大幅な見直しと、セフティーネットのシステム再構築を強いられた。

日本は、移転経費の殆どを負担した。

累積赤字の拡大と、将来的な国家プロジェクト（新幹線・万博・サッカーワールドカップ・冬季オリンピック等）の見直しを余儀なくされた。

そして、沖縄は西表島を失った。

アメリカ政府は日本に先行して、早い段階で移転に同意した。

インフラの存在しない西表では、運用経費が想像以上に増大するのは目に見えている、日本の地域振興を伴わない（おもいやり予算）の増額は流石に望めない。

それらを見做してまで、米政府が移転に同意したのには、背後に中国の影があったからだ。

――同意しなければ、沖縄は人民解放軍を西表に誘致するかも知れない。

最後まで難色を示したのは、日本政府である。

消費税をいくら増額しても、税収が増えない状況が続いていた。

地方交付税に大鉈を振り、国家公務員給与を大幅に減額しても、赤字国債増加を抑える目途が付かなかった。

年金資金切り崩し――自民党幹部の口々から、この言葉が囁かれ始めた。



(三方一両損)とはよく言ったものだ、しかし、状況はそんなに甘いものではない。沖縄県議会での知事の演説の直後から、県庁には抗議の電話が集中した。貴重な自然を破壊する点において、普天間の辺野古移転と何ら変わらない、其れどころか規模を更に拡大して、遥かに深刻な蛮行だという内容が多かった。なんだかんだ言っても、結局、県内移転に落とし所を求めたのは、(大山鳴動して鼠一匹)だ、というものもあった。

それらの抗議に対して知事はこう答えた。

——西表島の自然が破壊されることに関しましては、申し開きの仕様がありません。カヌムリワシや、イリオモテヤマネコを始めとする多くの固有種が失われます。汽水域のマングローブ林は、現況を維持するのが不可能となるでしょう。

現在、同島に居住される約2,500名の方々には、十分な補償のもと他の島へ移住を促します。

沖縄県民としまして、最も重要なことは、米軍と生活圏を重ねないことであります。平和に暮らすその頭上に、米軍が居て欲しくないのです。

生活圏を重ねないことにより、今私たちが抱えます殆どの問題が解決されます。どんな犠牲を払ってでも、これだけは確保していきたいのです。

背に腹は代えられないのです——。

西表島そのものの、アメリカへの分離割譲が日本国内で議論された、しかしそれにはアメリカ政府が強い難色を示した。

今や東アジアにおける、アメリカのプレゼンス維持に関して、日本の支援なしでは成立しないのである。



オフィス棟の窓ガラスの外側が、一面真っ白になった。

この時期、一日一回は必ずあるスコールだ。

10分から15分、強い雨が降り続く。

最後の（嘉手納カーニバル）が雨に霞んで・・・哀れだった。

おわり。

以上、すべてフィクションであり、現存する個人、団体には一切関係がありません。

## 嘉手納カーニバル

<http://p.booklog.jp/book/112285>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112285>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト